

岩見沢聖十字幼稚園 関係者 評価表

評価年月日 令和2年2月12日

評価者氏名 瀧澤聡 (北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科)

【園長の自己評価について】

本評価は、A (十分に達成されている) ,B (達成されている) ,C (取り組まれているが、成果が十分でない) ,D (取り組みが不十分である) の4択でした。全評価54項目中、Aが42項目、Bが12項目であり、CとDが0項目でした。このことは、基準が達成されていると思えました。

Aの数が、昨年度(46項目)に比べて4つ減少し、Bの数が昨年度(8項目)より、その分4つ増加しました。今一度、その原因を探りAの数が増加に転じるように検討していただけたらと思います。

また、「人事管理」について、新採用2年目の職員が年度途中で退職しましたが、そのことが契機となり、背景を探るべく園長が全教職員と面談したとのことでした。その結果、彼らの業務量の多さ等が課題として浮き彫りになり、クラス編成や労働時間の短縮等の大きな変革を次年度は実施して保育に臨むことになるとのことでした。これらの問題解決のために、園長が迅速に対応したことは、組織の危機管理リスクを減少させる意味でも、とても意義のあることであったと理解できます。このことが、聖十字幼稚園にとってさらなる飛躍となるように、本園の保育が機能していくことを期待しています。

【教職員の自己評価について】

本評価は、A（おおむね良い）、B（ふつう）、C（あまりできていないので、一部検討を要する）、空（不明）の4択でした。全評価87項目中、Aの最多項目が67項目、Bの最多項目が17項目、AとBの最多項目の同数項目が3項目、Cと空が最多項目となることはありませんでした。結果自体は、昨年度に比べ、Aの最多項目が1項目（昨年度65項目数）の増加、Bの最多項目が5項目（昨年度22項目数）の減少でした。

職員の評価に関して、「保育の計画性」「保育の在り方、幼児への対応」「保育者としての資質」「保護者への対応」「地域の自然や社会とのかかわり」では、Aが多くBがそれに次ぐという結果であり、一方で「研修と研究」では、Bが多くAがそれに次ぐという結果でした。

これらの結果から、「地域の自然や社会とのかかわり」が、昨年度に比べてAの項目を増加させており、このことは、園庭の「あそび環境」がおおよそ完成されたことの反映であったと思います。教職員もこのことに深くかかわり、子どもたちと保護者から、とても高い評価を獲得したので、彼らのこの領域の保育に対する意識も変化し、自信につながった可能性も考えられました。

【保護者のアンケート結果について】

今年度は、「2019学校評価・保護者アンケート」の他に、「特別項目 環境づくりについて（感想）」が設定されて、保護者からたくさんコメント等を掲載できていました。前者については、例年通りでしたが、今後の検討課題と保護者に理解を求める点が、明確でとてもわかりやすいと感じました。具体的には、保護者の方々の疑問等について、

それに対応するために幼稚園としての理由を明確に述べられていました。特筆すべきは、やはり后者であり、「あそび環境」が創造され整備されたことの成果について、多くの保護者から、「集中して遊べるようになった」「様々な運動ができるようになった」「あそびに創意工夫が随所に見られるようになった」「自然とのかかわり増え、抵抗を示すことがなくなった」などの声が届けられていました。

【本園の自己評価について、上記記述以外のご意見、ご感想がありましたらご記述下さい】

「あそび環境」が新しく創造され整備されて、さらにそのことについて保護者から支持が得られれば、子どもは大きな成長を見せてくれるという古典的な保育の成果を、本幼稚園は経験したのだと思います。このことを、保護者や教職員からのコメント等で実証していくことも重要ですが、学術的にも調査することで、さらに本園の保育の成果が確かめられ、その信頼性等を獲得できるのではと考えました。科学的なアプローチによる保育の成果の探求は、他の園がそれを継承していく際に、明確な根拠となっていくため、同じような成果を生み出せる可能性が高まるということで、非常に重要と思います。本園は、市内、全道、そして全国の幼稚園などのモデルになる一つの事例と思いました。